





## 審査結果報告書

2020年 / 月 28日

主査 氏名 松永 蕙 彦 

副査 氏名 高橋 香代子 

副査 氏名 今井 忠則 

副査 氏名 佐藤 春彦 

1. 申請者氏名 : DM16017 佐々木秀一

2. 論文テーマ :  
負荷量と姿勢の違いによる肩関節外旋運動時の棘下筋および肩関節周囲筋の表面筋電図による分析

3. 論文審査結果 :

肩回旋筋腱板（腱板）は肩関節機能の動的安定性の役割を持つため、腱板を含む肩関節周囲筋の不均衡の是正のための運動療法は重要な治療プログラムの一つとなっている。この不均衡を是正するための運動療法を行う際には、上腕骨頭の上方向偏位に起因する三角筋や僧帽筋の筋活動を抑制しながら、腱板の筋活動を高める必要があるが、これらの治療指針に適した指導内容については経験的に実施されているものが多く、未だ十分な見解が得られていないのが現状である。特に、外旋機能を有する腱板の中でも、棘下筋が最も強力な外旋筋として機能しているが、棘下筋の筋活動を選択的に高めるための姿勢や負荷量、さらには運動負荷中の棘下筋の筋活動の変化は未だ客観的に示されていない。佐々木秀一氏の研究はこの課題に着目し、肩関節外旋運動時の棘下筋ならびに肩甲骨周囲筋の筋活動の特性について筋電図を用いて検討するとともに、腱板断裂患者を対象に適切な負荷量と姿勢について詳細に検討したものである。その結果、腱板断裂患者においては、術後早期で腱板機能が低い状態で運動療法を行う際の有用な姿勢と負荷量は背臥位で0.5kg以下であること。また、日常生活への復帰に近い回復期の過程では、僧帽筋上部線維の代償に留意すれば、座位で2kg負荷の訓練が促進に有効であることを明らかにしている。

上述のように、本研究の成果は、腱板損傷（断裂を含む）患者に対する運動療法において、治療指針に応じた適切な処方内容を具体的に提示した初めての報告である。佐々木氏の研究活動は、他の治療手技との比較試験など、治療効果を検証するには至っていないが、運動療法を効果的に実施するうえで極めて有用な基礎的な研究であり、医学博士号にふさわしい学術活動を継続することが期待できると考えられた。

以上のことから、本研究論文は、博士号の学位に値すると判断された。